

[成果情報名]高冷地における小玉系品種を用いた夏秋パプリカの露地簡易雨除け栽培

[要約] 高冷地での小玉系品種を用いた夏秋パプリカ露地栽培は、トマトの簡易雨除け資材を用い、3月上旬播種、5月下旬定植で7月下旬から11月上旬まで収穫できる。夏秋パプリカは、高冷地における新たな果菜類の夏秋栽培品目の候補である。

[担当] 総合農業技術センター・高冷地野菜・花き振興センター・野菜作物科・塩澤侑真

[分類] 技術・普及

[背景・ねらい]

パプリカは市場で人気拡大しており、販売価格も高い有望な品目である。昨年度までに、夏秋トマトの簡易雨除け資材を用いた、高冷地における大玉サイズのパプリカの露地栽培技術を確立した。本年度は小玉系品種による栽培技術を確立する。

[成果の内容・特徴]

1. 高冷地における夏秋パプリカの露地栽培で、大玉系品種と同様にトマトの簡易雨除け資材を用い、3月上旬に播種し5月下旬に定植することで、小玉系品種を7月下旬から11月上旬まで収穫することができる（図1、図2、図3）。
2. A品収量は、赤色品種「ベイビーキスレッド」では5,513kg/10a、黄色品種「ベイビーキスイエロー」では5,784kg/10aである（図4）。
3. A品一果重は、赤色「パプミディレッド」で74g、黄色「パプミディゴールド」で75.5gであり、橙色「ベイビーキスオレンジ」は87gで供試した小玉系品種の中で最も重い（表1）。
4. パプリカの10aあたりの年間所得（試算）は931,116円である（表2）。

[成果の活用上の留意点]

1. 試験は北杜市明野町の標高747m（高冷地野菜・花き振興センター）で行った。
2. 定植は遅霜が発生しなくなる5月中旬以降に行う。病害を予防するために、定植後直ちに雨除け被覆を行う。また雨除け資材に合わせ、畦幅2m（床幅70cm）、株間20cmを目安とし、夏期の地温上昇を抑制するために白黒ダブルマルチを用いた（図2）。
3. 仕立て方法は主枝2本仕立て1節2果どりとした（図2、図3）。
4. 施肥は基肥として緩効性肥料を用い、3要素成分量（N、P₂O₅、K₂O）で各30kg/10aを施用した。また、草勢をみながら9月以降に追肥を行った。
5. [成果の内容・特徴] 2.3.の数値は2024年と2025年のデータの平均値である。

[期待される効果]

1. 高冷地における夏秋パプリカの小玉系品種の栽培技術が確立され、大玉系品種とともに、新たな果菜類の夏秋栽培品目となる。

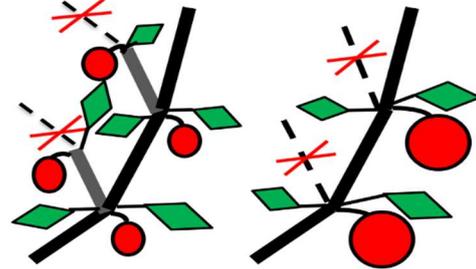
[具体的データ]

果実のタイプ	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
小玉系		○		▽			□				

図1 夏秋パプリカ小玉系品種の作型 ※○:播種 ▽:定植 □:収穫



図2 雨除け資材を用いた夏秋パプリカ栽培



小玉 大玉(参考)

図3 小玉系パプリカの整枝および着果節位(左)

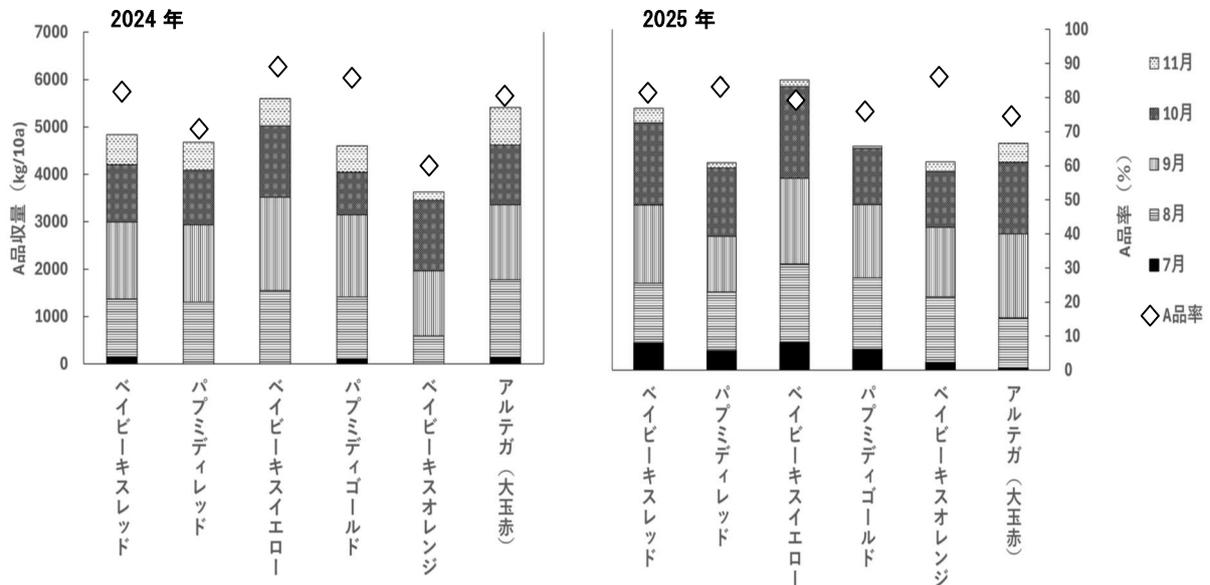


図4 パプリカのA品収量とA品率

表1 小玉系パプリカの平均A品一果重

	赤色		黄色		橙色
	ベイビーキス レッド (g)	パプミディ レッド (g)	ベイビーキス イエロー (g)	パプミディ ゴールド (g)	ベイビーキス オレンジ (g)
2024年	60	78	65	78	90
2025年	62	70	64	73	84

表2 パプリカの所得(試算:10a)

収量	5,000kg
単価	556円/kg
粗収益	2,780,000円
労働時間	600h
経営費	1,848,884円
所得	931,116円

※収量は試験結果を基にした概数、単価は直近3年の大田市場でのピーマン(パプリカ含む)の単価の平均値、労働時間・経営費は栽培方法・資材が類似するトマトの県経営指標の数値を使用して算出。

[その他]

研究課題名: 高冷地における夏秋パプリカの簡易雨除け栽培技術の確立

予算区分: 県単

研究期間: 2022~2025年度

研究担当者: 塩澤侑真、岩間亮太、窪田浩一、藤木俊也、赤池一彦